

2014年9月28日 主日礼拝

説教「あふれる祝福」

マタイの福音書14章13-21節

【パンの奇蹟】

多くの人は、ほんとうにこんなことが起こったのかと不思議がります。けれども、主イエスは、神。この奇蹟は驚くようなことではありません。悪魔が荒野で石ころをパンに変えるようにと、主イエスを誘惑したのは、主イエスはそうすることができたからです。なぜ、主イエスはパンの奇蹟を行われたのか。そこがたいせつです。

【不安の学校】

この聖書の個所は、ついのだかなできごととして読んでしまいがちです。けれどもマタイは、この背景に厳しい状況があったことを描いています。バプテスマのヨハネが領主ヘロデに殺され、このことを聞かれた主イエスは弟子たちを連れて、寂しい所に行かれようとしたのです。それは不安や恐れに立ち向かう学校を開こうとされたのでした。ところが、群衆が押し寄せてきたので、主イエスは群衆のただ中で、群衆の必要に応えながら、同時に弟子たちの、教育をなさいました。不安の学校を開かれたのです。私たちも弟子たちと一っしょに、この朝、不安の学校で学びましょう。それは、不安や恐れの中で、主イエスを信頼すること。信頼して自分を主イエスに

ゆだねることです。

【パンとしての私たち】

マタイの福音書が書かれたのは、すでに殉教する人々が出ていた時代。主イエスを信じること、死を意味する場合もあったのです。だから教会は、この聖書の個所を不安の学校の教科書として読みました。ここから、殉教の時代にいかに生きるかを学んだのです。

教会は、パンの奇蹟の物語を、ただ主イエスがパンを増やしてくださる物語として読んだわけではありません。主イエスには、何でもできる。だから、自分が、殉教しないでも済むように主イエスがしてくださる、それだけを願ったのではなかったのです。

むしろ、教会は5つのパンは、自分たちのことだと考えました。5つのパンが主イエスの手にゆだねられたとき、素晴らしいことが起こりました。同じように、教会は主イエスを信頼して、主イエスの手の中に自分をゆだねました。みこころであれば、生き延びて伝道する。あるいは、殉教することがみこころであれば、それもおゆだねします、と主イエスのみ手の中に自分を置いたのです。

私たちもパンです。今は殉教の時代ではないけれども、それだけに、なにかつかみどころのないような難しい時代とも言えます。そんな中で、私たちは、主イエスに自分をゆだねます。自分の思いではなく、主イエスのみ

こころを願うのです。そのとき、驚くような祝福が教会に注がれます。パンが増えたのではなく、パンを増やす力を持つ主イエスを喜ぶ教会にそれは起こるのです。

【ほんとうの支配者】

「そしてイエスは…天を見上げて、それらを祝福し」(19)の原文は「天を見上げて、神に向かって祝福の言葉を言った」という意味です。主イエスは、「父よ、あなたこそが本当の支配者です。ヘロデが好きなように振る舞っています。バプテスマのヨハネの首をはねて、自分が支配者だと思っています。けれども、ほんとうの支配者はあなたです。弟子たちがこれから、どんなに迫害されても、それでもほんとうの支配者はあなたです」と、おっしゃったのです。

私たちのいのちも死も、私たちが憎む者さえも、すべてを支配しておられる父がおられます。この父の支配の中で、主イエスは、弟子たちを、私たちをお用いになります。パンは私たちです。私たちのもっているものであり、私たち自身でもあります。父の支配のもとで、私たちは、主イエスの祝福の中にすべてを置く訓練を受けているのです。

18周年を迎えた明野キリスト教会。父の支配のもとで、力の限り愛し合うことができる私たちです。ごいっしょにさらなる愛の日々を重ねてまいりましょう。